

日本の英語教育政策についての専門家の言説

ーポッドキャスト番組の談話からー

泉谷律子 (大阪大学大学院生)

1. はじめに

文部科学省は、平成 29 年度に審議・了承された「大学入学共通テスト実施方針」¹において英語では民間事業者の認定試験を導入することを決定した。文部科学省の説明²によると、この決定は「読む」「聞く」「話す」「書く」の 4 技能を適切に評価するという考え方に基づいている。このような決定は、一般に流布している「4 技能は同一平面にありバラバラに習得できるもの」「日本人は英語がしゃべれない」(阿部, 2017) や「日本の英語教育は間違っている、なぜなら日本で習った英語はまったく役に立たなかった」(斎藤, 2013) などという素朴信念を強化することにつながると予想される。そこで、本研究では、民間試験導入を推進している英語教育の専門家が、非専門家との相互行為の中で大学入試改革を語る際に、何を前景化させ、何を排除してメディア上の論理を構築していくか、そしてそこにはどのようなイデオロギーが潜んでいるかということを検討する。

2. 先行研究と分析概念

メディアの中でいかに教育は言説的に構成されているのかを問う研究は、一方向の文字テキストである新聞報道(築地 2013 など)や画像と音声によって専門家やインタビュアーなどの出演者の談話を扱うテレビメディア(越智・酒井, 2018 など)では多数見受けられるが、双方向コミュニケーションという観点からは、専門家と聴き手との談話に迫っていく必要があるため、一方的に情報を流すマス・メディアよりも、専門家と一般市民をつなぐ双方向性のあるインターネットメディアが本研究には適っている。そのため、本研究では個人が制作したポッドキャストの無料バイリンガル会話番組の談話を分析する。本研究では、1) インターネットメディアの談話の中で、どのように民間試験導入の正当性は構築されるのか、2) このような談話は一般に流布している素朴信念を強化するのか、というリサーチ・クエスチョンを設定した。

イデオロギーという概念は、様々な学問分野の中で様々な用途で使われている概念であるが、本研究ではテリー・イーグルトン(1999)の6つの定義の中から本研究の目的に最も近いと思われる5番目の定義を採用する。すなわち、イデオロギーは支配的な社会権力が自らの利害関係の促進と正当化をすることであり、支配的イデオロギーは支配者に都合のよいやりかたで社会構成体を統一するのに役に立ち、被支配階級や集団などを共犯関係に巻き込むという前提がある(イーグルトン, 1999)。また、日常会話の分析における本研究と関連する概念としては、あいづち(メイナード 1992, 堀口 1997)、対人関係に関する終助詞(大曾, 2005)、協働的なオーバーラップ(Tannen, 1984)、社会的距離(van Leeuwen, 1999)ポリフォニックな対話的空間(西口, 2013)があげられる。

3. 調査概要と分析対象：日本語と英語でニュースを語るポッドキャスト番組

調査の対象としたポッドキャスト番組「バイリンガルニュース」は、共に日本語と英語のバイリンガルである企画者の日本人女性とアメリカ人男性が独自の観点から選んだニュースを日本語と英語で読み、ニュースの内容について日本語で、英語で台本なしで語り合う、といった形式のもとに 2013 年 5 月 15 日から毎週 1 時間から 2 時間配信されているものである。2014 年 7 月に iTunes store のポッドキャスト番組ランキングで 1 位を獲得し、2018 年 6 月 6 日現在 Facebook のページに 28282 人、Instagram に 19188 人、Twitter に 45240 人のフォロワーと呼ばれる登録者を持つ。

¹ 文部科学省「大学入学共通テスト実施方針」

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/10/24/1397731_001.pdf (2018年5月19日最終閲覧)

² 文部科学省「大学入学共通テスト実施方針策定」

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/10/24/1397731_002.pdf (2018年5月19日最終閲覧)

今回分析の対象にした回は2014年2月24日に配信された第68回配信³で著名な英語教育専門家をゲストに招き、ホスト出演者と3人で話している計2時間1分25秒のものである。Twitter上では配信直後から3年後までこの回に言及した投稿が断続的に続き、ほぼすべての投稿が配信内容に肯定的である。この第68回で話された内容は、筆者がトピックごとに28のセクションとして分けた。本研究で分析の対象としたのは、英検・TOEIC・TOEFLがトピックとなったセクション6と大学入試改革の必要性がトピックとなったセクション17である。分析は、ゲストの語りの特徴、ゲストと出演者の相互行為の特徴、大学入試改革についての談話の構造の3つの観点から行う。

4. 分析結果と考察

4.1 ゲストの語りの特徴

ゲストの語りには、インフォーマルな表現の多用、他者の声の引用、英語教育に関連することば、断定的な数値による表現、およびピッチの上がり下がり、語りの速さ遅さ、声の大小などの変化が多彩で豊かな音声表現が特徴として見られた。インフォーマルな表現の発語例を挙げると、セクション6では、抜粋1⁴のようにゲストCの語りには「最初の頃にね(112行目)」「ちゃんとあったの(113行目)」「入ってたんだよね(113行目)」「めんどくさい方をやめちゃおうってなるよね(125行目)」「やめちゃおうて[なるよね(125行目)]」などが見られ、語り手のCに権威的でない親しみ深さという印象を与えることに貢献している。また英語教育に関連することば、例えば、「文法項目をみるスコアが::ものすごく高い相関がある(117行目)や数値「point nine five correlation (between writing and grammatical) [knowledge (120-121行目)]」により専門知識が印象づけられる。他者の声の引用例については、後述の4章3節で言及する。音声表現の多彩さを示す発語例としては、抜粋2のように速度を速くした(><)発語の直後に速度を落とし(<>)同時に強調()する、頻繁に間をおく(())という変化が見られる。重要なことは、以上のような語りの特徴は、Cを、その高い社会的地位にもかかわらず権威を押しつけない、親しみの持てる専門家であると印象づけることに貢献している、ということである。

抜粋1

112 C: >だから<ねあのむかし::TOEFL ができた時に::一番>最初の頃にね(.)<
 113 あoのライティングがちゃんとあったの中に入ってたんだよね
 114 A: あ:::
 115 C: で、hh ところが途中で、ライティングのスコア::と::文法のスコア
 116 A: あ::
 117 C: 文法項目をみるスコア:が::ものすごく高い相関がある(.)
 118 A: あ::
 119 B: ()
 120 C: >something like< point nine five correlation (between writing
 121 and grammatical) [knowledge
 122 B: [()
 123 A: [あ::
 124 C: それだけ相関高いとどうなるかっていうと(.)おんなじ事測ってるんだ
 125 ったら(.)めんどくさい方をやめちゃおうて[なるよね
 126A: [あ hhaha あ haha そうか
 127 C: >それで結局<ね:ライティングやめちゃったの

抜粋2

141 C: ね(.)>ていう事はどういう事かっていうと<<文法は(.)
 142 ライティングのための>(.)必要条件

4.2 ゲストと出演者の相互行為の特徴

出演者とゲストの相互行為に目を転じると、出演者のあいづちの多用が目につく。さらにゲストの終助詞「ね」「よね」(メイナード, 1992; 大曾 2005) とその直後のあいづち(メイナード, 1992; 堀口, 1997)も特徴的である。さらに出演者AとゲストCの日本語のみならず、出演者AとB、ゲストCが英語で話している時も抜粋3のように協働的なオーバーラップ(Tannen, 1984) ([)、密着した会話(=)が随所に見られ、A、B、Cの談話の中で共感が形成されていることがわかる。さらに、低いピッチや音量でソフトかつくつろいだ(relaxed)声によって個人的な距離(personal distance)、高めのピッチと音量でしっかりした(full)声によってビジネスライクだがインフォーマルな社会的距離(informal distance)の

抜粋3

78 A: [right
 78 B: [it seems to have been impossible to creat the test that(.) did that=
 79 C: = (no it would be [impossible to do that)
 80 A: [たしかにたしかに(.)TOEFL
 81 C: [so it got be some

³ バイリンガルニュース (Bilingual News) 68. <http://bilingualnews.libsyn.com/size/5/?search=%E5%90%89%E7%94%B0%E7%A0%94%E4%BD%9C> (2018年3月28日最終閲覧) (セクション6は開始後14分30秒~19分43秒、セクション17は開始後56分48秒~58分21秒)

⁴ トランスクリプト記号

[オーバーラップ £ 笑いながらの発語 hehe または hahaha 笑い声(.) 2秒以下の沈黙
 >< 周囲よりも速い発語 <> 周囲よりも遅い発語 _ 強調表現 () 聞きとりづらい発語 Hhh 息を吐く音 .hhh 息を吸う音
 = 続けて聞こえる発語 : 長音

両方を交互に出演者およびリスナーとのあいだに実現 (van Leeuwen, 1999) していることが観察された。

4.3 大学入試改革についての談話の構造

セクション6はAのCが英検やTOEICとかはどのようなふうに見ているのかという問いかけをきっかけに開始する。それに答えCが文法だけ試すテストと比べ自分の今のレベルを知る上では悪くはないとこれらの民間試験を位置づける。その後、英語母語話者 (native speaker 以下 NS) である

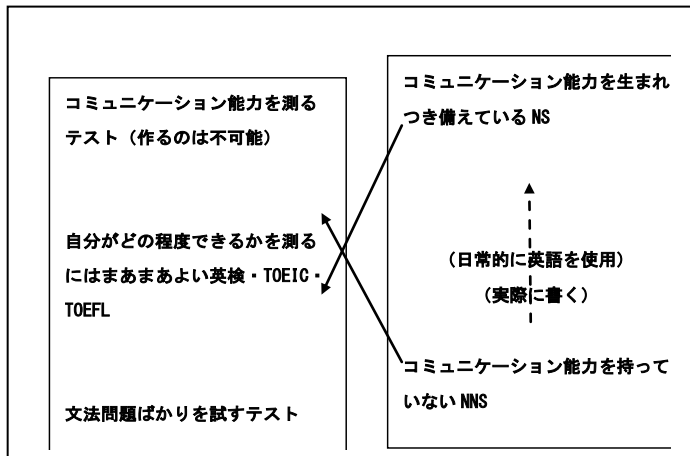


図1 A, B, Cの談話の中で構築されるテスト, コミュニケーション能力, NS/NNSの位置づけ

BがTOEIC受験をしたことがない、ということを受けてCはアメリカ人の学生のTOEFL平均スコアが677点中620であった実験を紹介し、英語非母語話者 (non-native speaker 以下 NNS) である日本人学生がもっと高いスコアを取ると述べて、コミュニケーション能力を測るテストを作るのは不可能である、と述べる。紙面の制約上全ての書き起こしを掲載できないため、セクション6の前半の談話構造を図1に示す。

しかしこの後Aは、抜粋4に見られるように英検一級保持者が英語がしゃべれないということで「demotivatedされ(95行目)」するという民間試験の否定的な側面に言及する。このAの発話内容は図1で見てきたように、コミュニケーション能力を測定する

抜粋4
 95 A: demotivated されちゃって: () なんかにこんなやつたのみにけいな
 96 () なっちゃうと思うんですね その英検でなんでそのスピーキング
 97 と: 例えは文法だったり: リスニングだったりそれぞれ違うじゃないで
 98 すか() というのはなんかなんか日本だとちょっと分けて考え考えて
 99 ないというか()
 100 C: >たぶんね<テストだけのために勉強したら()もゆるくテストを受け
 101 る技術ってあるでしょ

テストは存在しないということ、つまり英検・TOEFL・TOEICではコミュニケーション能力は測定できないという点、NSよりもNNSの方が高い点数がとれる現象がありえるというTOEFLのテストとしての性質と合わせて、Cにとっては好ましくない展開となっていることは容易に推測される。というのもCはこれらの民間試験の

大学入試への導入を推進しているからである。そこでCは「テストだけのため(100行目)」の勉強、さらに言い換えて「テストを受ける技術(100-101行目)」という、新たな要素をもち出し、英検一級保持者が英語が喋れない理由を、テストを受ける技術に専念しているからであると学習者の学習方法に帰属させる。これ以降、このセクション6では学習者は

テスト勉強だけでなく日常的に英語を話したりコミュニケーションをしたりするような機会を作る努力をしないと実際に英語を使えるようにならないので、学習者自らがイニシアティブを取るようにリスナーを励ます、という流れに収斂していき、民間試験をどう見るかという論点からずれていく。

再び、テストの話に戻るのはこのセクション6終了後37分経過したセクション17である。セクション17では、Cは大学入試の改革側に立つ自分とそれに対立する旧来の制度という対立構造を構築する。Cは「今まで通りのやり方」「今まで通りの勉強(168行目)」「今までと同じような勉強」「今まで通りのような日本人しか(171行目)と「今まで通り」という言葉を繰り返すことで、これまでの教育とその結果を否定的に印象付ける。そしてそれを「どう変えるかとなると(175行目)」「教え方云々(175行目)」という「理想論を言う(176

抜粋5
 168 C: 今まで通りのやり方やってたら今まで通りのような勉強しか
 169 しないから
 170 A: う::ん
 171 C: 今まで通りのような勉強() しなければ今まで通りのような日本人
 172 しか育成
 173 A: [hahaha
 174 C: [されないだろうから() これをどう変えるかとなるとその教え方云々という
 175 まありりり理想論を言うのはいいんだけど
 176 A: う::ん
 177 C: 現実の問題として入試が目の前にあるとだって入試はこうだからって
 178 言われないような[入試にしないと=
 179 A: [確かに
 180 C: =いけない[(んだけどね)
 181 A: [たしかに 今まさにそうですもんねそれが言い訳というか=
 182 C: =そう=
 183 A: =として成り立ってるやっぱこっちは今日の前にあるこの入試で
 184 忙しいから:=
 185 C: =うん=
 186 A: =そんなスピーキングとかやってる場合じゃないみたいいな
 187 C: そうそうそう

行目)」仮想の人物を作り、それに対して仮想の学習者の反論「だって入試はこうだから(178行目)」という声を語りの

中に登場させることによって、語られる世界をポリフォニックに拡張しつつ議論を構築する。その議論に対して、「言われないような[入試にしないと (179 行目)] という自らの解決案を提示する。A は C が構築した仮想の議論を、さらに具体的に「やっぱりこっちで今目の前にあるこの入試で (184 行目)」「忙しいから: (185 行目)」「そんなスピーキングとかやってる場合じゃない (187 行目)」という「言い訳 (182 行目)」として述べることで裏付けをし、その A の裏付けに C が同調することで、「理想論」の脆弱さとそのような強固な「言い訳」を打破するための大学入試の改革の必要性が構築されることになる。しかし、ここで解決策として提案されている「スピーキング」を含む「大学入試」は明らかに C が導入を推進している民間試験であろうが、先述の図 1 の談話の中ではコミュニケーション能力を測るテストは不可能であり、TOEIC は NS より NNS の方が高い点数を取ることのできるテストであり、A の発話から英検一級を取っても英語は話せず、テスト技術を習得すれば合格できるものであった。このような推進派にとって不都合な論点はすべてここでは後景化され、排除されている。

5. まとめ

本稿では、1) インターネットメディアの談話の中で、どのように民間試験導入の正当性は構築されるのか、2) このような談話は一般に流布している素朴信念を強化するのか、というリサーチ・クエスチョンを設定した。そしてその問いに答えるために、ゲストの語りの特徴、ゲストと出演者の相互行為の特徴、談話の構造の 3 つの観点からインターネットメディアにおける英語教育改革についての談話を分析した。その結果、権威を押しつけない親しみやすい英語教育専門家という印象を与える語りのもとで当の専門家と半専門家とも言えるバイリンガルが相互行為の中で共感を形成しつつ、民間試験の好ましくない側面を後景化し、論点をずらし、仮想の議論を構築し大学入試政策の正当性を主張していく過程を確認した。ここに隠されているのは、権威者が決めたことはその正しさを検証する必要がない、という支配的イデオロギー（イーグルトン、1999）であろう。このイデオロギーはまさに支配的な社会権力による自らの利害関係を促進した正当化し、支配者に都合のよいやりかたでの大学入試改革への向き合い方を統一し、英語学習のための番組制作者兼出演者およびリスナーを共犯関係に巻き込むという前提を踏まえていることが見て取れる。またこの分析結果は談話の内容がリスナーによって吟味されることがなくそのまま現実となって積み重なり、「日本人は英語がしゃべれない」（阿部、2017）や「日本の英語教育は間違っている、なぜなら日本で習った英語はまったく役に立たなかった」（斎藤、2013）という素朴信念を強化する可能性があるということを示唆する。

参考文献

- 阿部公彦（2017）．史上最悪の英語制作—ウソだらけの「4 技能」看板 ひつじ書房
- イーグルトン、テリー（1999）．イデオロギーとは何か（大橋洋一訳）平凡社．
- 堀口純子（1997）．日本語教育と会話分析 くろしお出版．
- メイナード泉子（1992）．会話分析 くろしお出版．
- 西口光一（2013）第二言語教育におけるバフチンの視点 — 第二言語教育学の基盤として くろしお出版
- 越智康詞・酒井真由子（2018）．テレビメディアにおける教育世論の構成と教育政策 信州大学教育学部研究論集 12, 17-36.
- 大曾美恵子（2005）．終助詞「よ」「ね」「よね」再考—雑談コーパスに基づく考察 鎌田修・筒井通雄・畑佐由紀子・ナズキアン富美子・岡まゆみ（編）言語研究の新展開：牧野成一教授古稀記念論集 ひつじ書房 pp. 3-15.
- 斎藤兆史（2013）．もう一度英語教育の原点に立ち返る 大津由紀雄・江利川春雄・斎藤兆史・鳥飼玖美子（2013）『英語教育、迫り来る破綻』ひつじ書房 pp. 29-50.
- Tannen, D. (1984). *Conversational style: Analyzing talk among friends*. New York: Oxford University Press.
- 築地達郎（2013）．文部科学省の高等教育政策過程におけるマスメディア報道との相互作用 龍谷大学社会学部紀要 43, 54-63.
- Van Leeuwen, T. (1999). *Speech, music, sound*. Basingstoke: Macmillan.